



砂漠がゴミで緑へ

心あったかニュース

アフリカの砂漠の緑化のお話を紹介します。テレビ番組の世界一受けたい授業でも放送されています。京都大学教授の大山修一先生は、アフリカのニジェールで少し変わった方法の緑化に成功しました。変わった方法とは、ゴミを使ったということです。アフリカ最貧国のニジェールは、国土の半分以上が砂漠のため、食糧不足と貧困、そしてテロの発生などの問題を抱えた国です。大山先生は、そこにゴミをまきます。ゴミには、ビニール袋なども混ぜつつあります。燃やすと有害物質の発生が心配されますが、家庭から出てすぐは、有害物質は、含まれていないそうです。このゴミを住処にして、活躍してくれるのが、シロアリです。シロアリは、ミミズのように有機物質を分解して、地表面を柔らかくしてくれます。シロアリの唾液で土が柔らかくなると、水と空気を含んだ植物が育ちやすい土地となるそうです。ゴミがシロアリの住みやすい環境を作って、シロアリが良い土を作ってくれる。

考えてみれば、自然な流れにも思えます。硬い荒れた土地が、半年で緑になりそうです。ここで養分を足さないともとに戻ってしまうので、植物が育つのに必要な窒素、リン、カリウムを土に与えるために、大山先生は、ニジェールの牧畜民にお願いして、糞がたまるまで、放牧してもらいました。牧畜民は、放牧する土地がなくて困っていたので、喜んでもらえます。ニジェールでは、放牧が農作民の育てた畑を荒らすということと対立となっていたそうです。大山先生のプロジェクトで、この争いの火種がなくなります。お互いに利益があります。争いから、協力へ。大山先生の緑化は、東京ドーム2個分に成功しているそうです。飢えと貧困の怒りがテロの原因となっていて、という現状が、緑化で、しかもいらぬゴミから変えていけるって、すごいですね。

捨てていたパイナップルから布へ

兵庫県立工業技術センター繊維工業技術支援センターが、沖縄産パイナップルの葉を使った糸を開発し、播州織の布づくりに取り組んでいる。

かりゆしウェアとして商品化を目指している。パイナップルの葉は繊維質のため、畑にすき込んでも土に分解されにくく、廃棄されてきた。その特性に注目し、布の開発に乗り出した。試行錯誤の末に紡がれた糸は、播州織の素材として十分な品質を持ち、布を織るとからつとした肌触りになった。神戸新聞 nextより

編集後記

ゴミは、いつから不要なものになったのか、考えていきました。循環がうまく回るには、ゴミも資源になります。江戸時代は、循環型社会だったといえますから、いつのまにか、変わってしまったようです。ゴミを見直すことが、争いから協力に変えていけるくらい、ゴミを捨てるという私達の感覚も変えていく時代がきているように思えました。